

Wesley Hall News



2007 青山学院 クリスマスツリー点火祭
(青山キャンパス)

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No. 94

2007.12.10.

特集 クリスマス

- 説教「十字架を眺めるクリスマス」…………… 伊藤 悟… 2
- 〈幼稚園〉イエスさまのお誕生を待ち望むアドヴェント…………… 久保小枝子… 4
- 〈幼稚園〉イエスさまのお誕生を喜び祝うとき…………… 川島 祥子… 5
- 〈初等部〉ベツレヘムへ…………… 窪田 靖… 6
- 大学学生四団体の学外活動 …………… 8
- 「地の塩、世の光」言葉の消える時代に…………… 松居 直… 9
- 青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その21… 氣賀 健生… 10
- キリスト教図書紹介『「集団自決」を心に刻んで』…………… 鈴木 直子… 12
- 私の教会 日本福音キリスト教会連合 永福南キリスト教会… 池田 敏… 13
- 初等部の新しい礼拝堂 米山記念礼拝堂 …………… 小澤 淳一… 14
- 〈コラム〉クリスマス・ツリー …………… 14
- 宗教センターだより…………… 15

説 教

「十字架を眺めるクリスマス」

マタイによる福音書第2章1, 2節



伊藤 悟

大学宗教主任

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

(マタイによる福音書 第2章 1,2 節)

東方の学者たちが十字架につけられたイエス・キリストの姿を遠くから呆然と眺めている奇妙な挿画を見つけました。じつに不思議な取り合わせなのです。なにか大事なことを語っているような気がして、私は興味深く見入ってしまいました。

東方の学者たちは、ご存知のようにクリスマス物語のなかに登場します。新約聖書のマタイによる福音書には、東方の占星術の学者たちが星を頼りに旅をし、エルサレムまで辿り着いたあと、産まれたばかりのイエス・キリストを探し当てたことが記されています。そう、彼らは主イエスの誕生場面に出てくる人々です。彼らが嬰兒イエスを見つめているのならわかるのですが、この画は、なんと彼らがイエスの十字架を見つめている場面を描き出しているのです。聖書で言うなら、マタイによる福音書の2章と27章が一度に描かれている合成図ということになり、どうにも奇妙な光景です。

マタイによる福音書は、学者たちはエルサレムに来て次のように言ったと記しています。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」はるばる東の国からやってきた学者たちがようやくたどり着いたエルサレムでありましたが、じつはそのエルサレム

こそが主イエスが十字架にかけられる場所にほかなりません。幼子を探し求めてきたのに、学者たちは十字架に直面させられたのです。

クリスマスはイエス・キリストの誕生を祝うときであり、私たちがこそって、産まれたばかりの乳飲み子イエスのまわりに集まり平伏して拝むときです（「クリスマス」はChrist（キリスト）とmas（礼拝）からなる語です）。しかし同時に、この乳飲み子イエスは、十字架にかけられるイエスでもあります。ですからクリスマスは、「十字架にかけられるイエス」の誕生を覚えるときであり、イエスの誕生は「十字架にかけられるための誕生」だったとも言うことができます。つまり十字架抜ききのクリスマスはあり得ないのです。

巷ではクリスマスを盛り上げる演出効果の準備はすっかり整っているようです。最近では10月末から町中のイルミネーションの準備が進められ、クリスマス商戦に向けての準備は夏前から始められるといえます。クリスマスの本来の意味など、どこかに飛んで行ってしまい、とにかく早くからの準備に追われて、まるでクリスマスを先取りしたかのような気分で、人々はクリスマスの「雰囲気」に酔いしれます。そしてその「雰囲気」は、私たちの心を躍らせ、浮かれた気分させてくれます。



しかし忘れてはなりません。クリスマスはキリストの「贖罪」ゆえに私たちに希望と喜びをもたらしてくれるときだということを。「贖罪」とは罪の代償のことです。犠牲や代償を捧げることによって罪過を赦し、帳消しにすることです。あらゆる時代の、あらゆる人々の罪の代償・代償として、神の子イエスが十字架にかけられ死に至らしめられました。本当は死をもって支払わなければならない私たち罪の代償を、キリストの代理死という仕方であがな贖った、というのがキリスト教信仰の真髄です。この贖罪があったゆえに、クリスマスは感謝に満ち溢れた喜びの日となっていくのです。また贖罪のキリストであるがゆえに、私たちはその誕生を祝ってキリスト (Christ) を礼拝 (mas) するのです。

人は楽しい祭りが大好きです。とりわけ日本人はその傾向の強い国民です。深い意味など考えずに、みんなで盛り上がり熱くなることができれば、そこに、ある活力を見出すのです。人や事物を祀り上げて、それに向けて気持ちを高揚させ、ある種のエクスタシー (絶頂感) を感じるのです。それによって、つらいことや苦しいこともあるけれど、それらすべてを吹き飛ばしたり、たとえ一瞬でもそのことを忘れていたり、まあ何とか元気を出して生きていこう、というわけです。それも大事なことです。とくに個人主義が進む現代社会にあつては共同体意識や互助精神が欠如していますから、一致団結して何かに取り組むことができると、それは新鮮に感じ、かつ人間同士の絆を強めることになります。

ですがそれらは、結局のところ自助努力であり自慰行為です。努力によって獲得する充足感であり、無理矢理気分を煽り立てて瞬間的快楽を経験しようとするものです。街中のクリスマスのデコレーションは、まさに抜群の演出効果によって自慰行為の手助けをするものです。美しいイルミネーションやファンタジックな世界を通して、人々にひと時の癒しと興奮状態を体験させてくれるのです。

聖書はクリスマスについて、じつはそれとはまったく正反対のことを教えています。人間にとって唯一の癒めは、キリストの贖罪に他ならないということです。つまり癒しや癒めは、自分の努力によって得られたり、人間の内から出る

アイデアによって克服したりするものではなく、まったく自己の外の出来事によって成就するものだというのです。クリスマスは、自慰行為によってではなく、神の贖罪行為によって、人間に真の平和と癒めが訪れたことを受け止めて喜ぶときであるのです。

聖書に記されているクリスマス物語を読んでいくと、いずれも人間の思いとは裏腹に、神の強引な関与によって起こった一連の出来事として、私たちの前に提示されていることが分かります。キリストの十字架による贖罪の出来事があったがゆえに、私たちは救い主イエス・キリストの誕生を平和の訪れとして喜びます。本来、クリスマスは一切の自慰行為や自助努力を否定するときであるのです。本当の救いや癒めは人間の自助努力によってではなく、神の介入によって可能となる、というのがクリスマスのメッセージです。

その意味では、あの挿画のなかで東方の学者たちが十字架のキリストを眺めていたのは、決して奇妙なことではありません。むしろそれこそが、「クリスマスらしさ」です。挿画のなかで、学者たちが十字架を見つめて眩みます。「遅すぎたかあ……。」いいえ、遅すぎたではありません。今まさに始まるのです。クリスマスはキリストの十字架を見つめるところから始まります。

クリスマスに必要なのは、イルミネーションでも、サンタクロースでも、プレゼントでも、ご馳走でも、恋人でもなく、キリストの十字架です。クリスマス・カラーの「赤」はサンタクロースの色ではありません。キリストが十字架上で私たちのために流された血潮の色なのです。

「贖い」は英語で “atonement” と言いますが、これは At-One-Moment だと教えられたことがあります。キリスト教信仰は、主イエスの十字架とそれに続く復活の出来事こそが、まさしく決定的な救いと癒しと平和の瞬間であることを大切にしてきました。

今年も、もう間もなくクリスマスが訪れます。クリスマスは十字架の前に立たされるときです。クリスマスは人間の努力によって作り出すのではなく、与えられるのです。いや、すでに与えられているのです。私たちの外側から迫ってくる「平和と癒め」の出来事を前に、私たちはただただそれを見つめて、感謝と喜びの祈りを捧げていくよりほかはないのです。

イエスさまのお誕生を待ち望むアドヴェント

久保小枝子

幼稚園教諭

今回は幼稚園の子ども達がどのように主イエスさまのお誕生を待ち望み、アドヴェント（待降節）を過ごしながらクリスマスを迎えるのか、その一端をご紹介します。

＜クリスマスの意味を知って待つ＞

初めて幼稚園でクリスマスを迎える3歳児の子ども達に「クリスマスって何かしら」と聞いてみると、子ども達はにっこり微笑んで「サンタクロースが来る日」と答えます。しかし私達保育者は、アドヴェントに入ると「クリスマスはサンタクロースからプレゼントをもらう日」だけではなく、神さまの独り子であるイエスさまのお誕生を喜び祝う日であることを様々な活動を通して子ども達に知らせていきます。子ども達は1年、2年、3年それぞれ年を重ねるごとにクリスマスの意味を知り、興味関心が広がっていきます。私達保育者は、クリスマスの真の意味を語るにふさわしい環境を整え、適切な言葉と語り方でイエスさまの降誕を子ども達に伝えたいと願い、聖書物語や世界各地で語られてきたクリスマスのお話などを準備していきます。

＜アドヴェント礼拝＞

3学年の子どもと保育者そして保護者が共に礼拝室に集まり、クランツのろうそくに火を灯して3回のアドヴェント礼拝を守ります。礼拝では、担当の保育者らによってテーマが設定され、お話が語られます。例えば「献げる」がテーマになりますと、担当の保育者は、レイモンド・マクドナルド・オールデン作「だれが鐘をならしたか」やジャン・カルロ・メノッティ作「ア



マールと三人の王様」などを話します。またアドヴェント礼拝では、毎年保護者の方達がハンドベルを演奏して下さいます。子ども達は毎週お話を一つずつ聴き、大好きなお母さんの演奏するベルの音を聴きながら温い気持ちになり、一週ごとにイエスさまのお誕生を喜び祝う心の準備をしていくのです。

＜献金をおささげするために＞

クリスマスと言えばプレゼントがつきものですが、幼稚園では小さな子ども達がプレゼントをもらう日だけではなく、自分達に出来ることを考えプレゼントをする日でもあることを大切にしています。子ども達はアドヴェントの期間、幼稚園で作った献金箱を家に持ち帰ります。ご家庭にも協力して頂き、お父さまお母さまには、子どもと一緒に話し合い、献金をおささげして頂くようお願いをしています。A子は、毎日お母さんのお手伝いをしてお小遣いをもらい献金をしました。B男は、買い物に行くとき好きなお菓子を一つ買ってもらえるのだそうですが、それを我慢して献金をしました。C男はアドヴェントの3週間、渋谷から表参道の一駅をお母さんと毎日歩き、その電車代を献金しました。クリスマス礼拝当日、一人ひとりの子どもがこの献金を神さまにおささげしてクリスマス礼拝は始まります。尚、この献金は日本聾話学校、チャイルド・ファンド・ジャパン（アジア、アフリカ諸国の子ども達の成長と地域の自立を目指して活動するNGO）、ペシャワール会（アフガニスタンの医療活動）等にお送りしています。



イエスさまのお誕生を喜び祝うとき

川島祥子

幼稚園主事

＜クリスマス礼拝を守る＞

幼稚園全体でクリスマス礼拝のときをもち、イエスさまのお誕生を皆で喜び祝います。子どもたちに、イエスさまのお誕生は神さまの愛が一方的に人々に注がれた恵みのときであることをクラス礼拝やアドヴェント礼拝を通して伝える備えをした後に、いよいよ厳粛な心もちで、ページェント（降誕劇）を通して保護者も参加しつつ全体で喜びを分かち合うのです。

ページェントは練習をして劇を見てもらうといった発表のときではありません。「世界で最初のクリスマス」を皆で経験していくのです。ヨセフ、マリア、ガブリエルや天使たち、羊飼ひ、星、ローマの王さま、東の博士たちの役を年長が中心になって演じ表わしていきます。そして皆を代表して献金のお祈りをささげる役割も年長が担っていきます。ページェントのなかでここかしこに子どもたちや保護者のクリスマスの賛美が込められていきます。それは、まさに、イエスさまのお誕生と今を生きる子どもたちが繋がれていく重要な場であり、ページェントを通して礼拝していくのです。ページェント自体がクリスマスのメッセージになっていくのです。ページェントにいたる過程は、クリスマスにふさわしい、子どもたちが楽しんで作り上げていくときでもあります。



2006年度のクリスマスのことを担任の保育者が記録した保護者向けのお便りから要約しますと次のようなことがありました。全体練習に参加した、年少組の子どもたちは、大天使ガブリエルが登場すると「飛んでー！」と歓喜の声を上げ、マリアが台詞を言い終わると「しゃべってるよ」と新鮮な思いが溢れ、また賛美のときも真剣な面持ちで一生懸命歌いました。歌い終わると思わず自分たちがページェントに参加したという特別なうれしさがこみ上げるなど、年少なりにクリスマスを楽しみに受け止めているようです。年長はというと、クリスマスの前日、

練習に向けて降園前にページェントの順番で子どもたちが椅子を並べた後、女兒が「ぼく



らは村の羊飼いです・・・」の曲を弾くと、そこにいた数名の子どもたちが羊飼いとなって子どもだけのページェントが始まりました。そうするうちに初めからやろうということになり、だれかがその場で何役かの役になりながら、楽しくてたまらない様子で進められていきました。仲間と心を合わせていく経験をしながら、クリスマスへ一日一日が重ねられていくのです。

子どもたちは友だちとまた仲間と生活しながらクリスマス礼拝の日を迎えるのです。礼拝は感謝と喜びをささげるクライマックスと言えるかもしれません。まさにその最後に献金の祈りが捧げられます。クリスマス、それは神さまが人を愛し救うために究極の愛をくださった出来事です。子どもたちの心にその愛が刻まれるようにと願って、クリスマス礼拝のときを過ごしていきます。

＜保護者会クリスマス礼拝＞

日頃、聖書の学びを通して福音に触れている保護者の皆様、心を一つにしてクリスマスの感謝の礼拝をささげることを大切にしてきました。院長の深町正信園長先生からクリスマスのメッセージを伺い、クリスマスが人知を超えた神さまの愛のご計画であることに心揺さぶられるときでもあります。ろうそくに灯りを灯し、人々の間に来られた、世の光であるイエスさまを一人ひとりの心にお迎えするのです。礼拝として厳粛なときでありながら聖歌隊のお母様たちの賛美の中で、神さまの愛にふれる暖かなひとときでもあるのです。



The
Lawyer is born.

ベツレヘムへ

窪田 靖

初等部教諭



10月の終わりが近づくと、クリスマス讚美礼拝に出演する児童の募集が行われます。初等部のクリスマスについては、これまでも様々な形で報告されていますので、今回は讚美礼拝に出演が決まった児童の声をお届けしたいと思います。

○喜びの光と幸せの光

「ありがとうございます。」

最初に私の口から出た言葉。私の心は喜びであふれている。なんと私は、1年生のころからずっとなりたかったマリア役になれたのだ。

マリア役は、クリスマス讚美礼拝の中でもとても大きな役である。その大きな役に今年私が選ばれた。

私は1年生の時、子ども役のオーディションを受けた。なのに途中から、私もという子がいって、結局じゃんけんになってしまった。そして私は子ども役になれなかった。その悔しさをバネにして、私はマリア役に立候補した。その日から私は、いつも寝る前にしているお祈りに、神様どうか私がマリア役にえらばれますように、と付け加えた。

そして10月26日金曜日のテレビ礼拝の後、オーディションを受ける4人のメンバーがそろった。私は心ぞうが今にも飛び出しそうなくらいきん張してきた。

まず順番を決めた。じゃんけんでは私は一番最初だった。オーディションが始まり、みんなは外に出た。私は舞台の上に正座し、せりふを言った。今までのきん張は飛んでいってしまった。

オーディションは無事に終わった。私はなぜか2回やった。先生は、

「トップバッターだから」

と言っていた。

そして結果発表の時先生が、

「今年のマリアは原さんです。原さんが一番自然にやっていたからです」

とおっしゃった時、私の心の中はパッと明るい光に照らされた。そう、喜びの光と、幸せの光に。
(5年生 原 真央)

その役に対する思い入れ、オーディションや抽選での気持ちが伝わってきます。ヨセフ役に決まった6年生の**多田羅大暉君**は、

「入学の前の年に見たヨセフの姿をカッコいいと思う、1年生になってヨセフは6年生がすると知って、絶対になるぞと心に決めた。・・・オーディションでは心臓が激しく鼓動しているのがよく分かり、12年間生きてきて、鼓動をこんなに強く感じたのは初めてだと思った」と書いていますし、**宿の主人役**の6年生、**山口稜平君**は、

「ヨセフとマリアに宿はあいていないと手をふる動作がカッコよくて、6年生になったらやりたいなあと、1年生の時から思っていた。・・・心からイエス様の誕生を祝福したい」と書いています。

他にも、

「初めてページェントを見た時、客席後方から綺麗な衣装を着て出てきた博士に目を奪わ





れ、その時からずっとあこがれていた。おごそかに進行していくページेंटの中で、博士の登場する場面はとても華やかで明るく見え、イエス様の誕生を心から祝っている感じがした。…あの、マントをつけ、帽子をかぶり、ゆっくり歩いてだん上へ上がる自分を想像してどきどきしてしまった。」(5年生 遠藤 了)

「1年生の時は、天使になりたいと思っていた。しかし、2年生の時、さっきまでうるさかった青学講堂を大きなきはきとした声で一気に静かにさせる上級生の姿に憧れて、それ以来、この役を目指してきた。去年のオーディションで受かることが出来なかったので、今年、再び挑戦してみることにした。」(6年生 赤津成美)

「初めてクリスマス讚美礼拝を見たのは幼稚園の時だった。その時にみ告げの場面が強く心に残り、その後、羊や天使など心がゆれることもあったが、私の心の中にはずっとみ告げのシーンがあった。本当はガブリエルの役をやりたいかったのだが、身長が低くそれはかなわなかったのだから、同じみ告げのシーンでもナレーターという形で奉仕したいと思った。」(6年生 中村 桜)

「幼稚園生の時、姉のページेंटを見に行ったら。劇が始まって最初に出てくるナレーターは、制服を着て、スポットライトが当たっていてとてもカッコよくて、私もあの役をやりたいと思った。…本番までに私の欠点である言葉が早くなりすぎることを直したい。」(6年生 中村 愛)

「初等部生として今までに3回ページेंटを見て、役をしている人の表情やじっと動かない様子がすごいなあと思い、いつか私もやってみたいなと感じた。役に私の顔をあてはめると、宿の客がピッタリだった。…脇役だけど、

イエス様が宿はいっぱい馬小屋にお生まれになった事実を知らせるためにいっしょうけんめい演じたい。」(4年生 高野有彩)

といった声があり、どんな役にでもそれぞれの思いがあるのだなとしみじみ思います。

「幼稚園の時に初めてページेंटを見た時は、ただ感動して見ていただけだったが、入学して、それが演じる人、裏方を受け持つ人など、初等部の子もたち全部で作り上げられていると知り、とても驚いた。ほくもいつかは…と、楽しみになった。」(羊飼いの声役 6年生 久保 直生)

「初等部のページेंटは、先生や裏方の生徒みんなで力を合わせて作り上げるところがすてきだと思う。…みんながイエス様のおたん生日を喜んでむかえることができるようにがんばりたいと思う。」(天使役 4年生 高橋 早紀)

という声が象徴しているように、神様が私たち一人一人を大切な存在としてこの世に送り出してくださったのと同じで、小道具の係や会場係、普段からクラブとして活動している聖歌隊やハンドベルクワイア、会場で讚美歌を歌ったり、レコーダーを吹いたりする初等部生、卒業生や保護者の方、どれ一つが欠けても成り立たない、初等部の讚美礼拝です。

讚美礼拝の始まりの言葉で、この記事締めくくりたいと思います。

「私たちも、羊や羊飼いの、博士たちのように、馬ぶねの中に生まれたイエス様を、一人一人の心の中にお迎えしたいものです。それではみんなで、ベツレヘムの野へ急ぎましょう。」



The
Dawid is born.

青山学院大学聖歌隊は現在約30名の隊員が所属しており、1982年より指揮者に藤本敬三氏を、2005年より伴奏者に身崎真理子氏を迎え、質の高い演奏を目指して日々活動しています。そのジャンルは讃美歌をはじめ、古典的な教会音楽から現代聖歌まで幅広いものです。

普段は大学の式典や礼拝での活動を中心としておりますが、夏には演奏旅行、秋には定期演奏会、冬にはクリスマスコンサートなど、一年を通して充実した活動を行っています。

特に、学外で行う唯一の活動である演奏旅行では毎年素晴らしい出会いを得ています。今年度は沖縄を訪問し、教会で行ったコンサートにおいて多くの方々を主を賛美する喜びを共にしました。他にも、老健施設では戦争を経験なさった方々を癒すと同時に平和の大切さを学び、幼稚園では劇「小さい羊」や子ども讃美歌を通して園児たちと交流することができました。賛美の喜びを伝えることが演奏旅行の目的ですが、私たちは毎年多くの喜びを与えられています。

また、これまでに四枚のCDを発売しており、いずれもこれまでにない方向性を示す教会音楽として好評を博しています。



第二部聖歌隊は今年度、隊員の数が増え、これまで以上に精力的な活動ができています。月に一度だった礼拝奉仕を月に2、3度に増やしたり、学内・学外の他団体との合同演奏会や、入学式・学位授与式などの学校行事に参加したりと、活動の場が広がりました。

練習日が週に一度、土曜日の午前中だけというので、練習時間は少ないのですが、指揮者でオルガニストの飯靖子先生が楽しいお話を交えて指導して下さるので、とても有意義な練習ができます。

聖歌隊のメンバーは、学科も年齢も様々ですので、歌だけでなく、お互いに学ぶことがたくさんあります。

クリスマス・ツリー点火祭のほか今後はクリスマス礼拝での奉仕や毎年3月に行っている定期演奏会の準備もあり、忙しくなります。この1年の集大成として第二部聖歌隊らしい、ユニークな定期演奏会ができるようアイデアを練り、練習に励みたいと思います。



○ 大学学生四団体の学外活動 ○

ハンドベル・クワイアは週2回、木村栄子先生のご指導の下、練習をしています。主な活動として、大学キャンパス内で行われる礼拝で演奏奉仕を行っています。また、毎年1回、演奏旅行へ行きます。今年の演奏旅行は京都へ行ってきました。3泊4日の日程で、幼稚園、病院、教会で演奏奉仕を行いました。たくさんのお客様に恵まれ、大盛況のうちに終わることができました。その他にも、10月に調布にある老人ホーム施設において、演奏をしました。下はその時の写真です。施設の皆様と暖かい一時を過ごすことができました。

そして、12月15日には青山学院大学青山キャンパスガウチャー記念礼拝堂において18時よりクリスマスチャペルコンサートを行います。ぜひ、「天使の歌声」とも呼ばれるハンドベルの音色を聞きにいらしてください。



埼玉県栗橋市に「光の子どもの家」という児童養護施設があります。私たち青山キリスト教学生会は、そこで毎年6月初旬に行われるバザーに、お手伝いとして参加します。具体的には、商品販売や後片付けを手伝い、さらに子ども達と一緒に楽しく遊びます。私たちはこの活動をたんに「ボランティア活動をする」といった表面的なものに留めるのではなく、「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい(ヨハネ13:34)」という聖句にもとづき、むしろその中身を大切にしようとしています。

青山キリスト教学生会は、日々「神がまず私を愛してくださったゆえに、私も人々を愛する」というビジョンのもとに活動をしており、それによってこの奉仕も行っています。キリストの愛がそこになければすべてが空しいからです。これからもキリストの愛をもって奉仕する姿勢を通し、イエス・キリストを証し続けることを祈り求めていこうと思います。



言葉の消える時代に

松居 直

福音館書店相談役



絵本づくり五十年を振り返ってしみじみと思うことは、私の児童図書の出版事業を支えてきた原動力は聖書でした。

1945年8月15日の敗戦を知ったときの実感は、喜びではなくまったくしらけた気分で、ただ“死ななくてもよくなったらいい”という思いでした。国のために死ぬことを18年間も教えられ、死ぬために生きてきたことが無意味になったのです。死ななくてもよいということは、“生きる”ということです。しかし人として生きつづけるとは、どういうことなのでしょう。何のためにいつまで、どのように生きるのかがわかりません。この時以来今日まで、“生きる”ということが心の底から離れることはありません。

翌1946年に旧制の同志社大学予科に合格し、入学式で初めてキリスト教の礼拝に接し、間もなく聖書を手にし、やがて聖書の講義も受けることになりましたが、宗教というよりも思想や哲学の話をお聴くような態度で、理屈でわかるとうするばかりです。頭で納得できても感情が働かず、実感が沸きません。聖書を読んでも、何か眼に見えぬ越えられぬ大きな厚い壁が立ちはだかっているようでした。

そのようなある日、学内の礼拝に出席していて、聖書朗読で「ヨハネによる福音書」第一章を耳にし、聖書の言葉を声で受けとめ、語る人の思いと信仰とが声を通じて伝わり、衝撃を受けました。

“言の内に命があった。命は人間を照らす光

であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。”

私は今まで“言葉”というものをこの時ほど強く意識したことがなく、この時、自分はまさに暗闇の中にいるのだ、そして言葉が光なのだ、言葉こそが命で人間を生かす光なのだ直感したのです。聖書の文字を読むだけでなく、聖書の言葉をもっともっと聴くことが大切なのだと思ひ、以後教会の礼拝に出席するようになったのです。

大学卒業とともに出版と編集という仕事につき、日々言葉と活字との格闘を繰返す労苦と歓びの渦中に、私を支えてくれたのは、言葉の内に命があり、言葉は光で生きる力なのだという思いでした。とりわけ絵本の編集に専念することとなり、経験ゆたかな保育者の方々や親の話を聴いたり、わが子に絵本を読んでやってみると、声の言葉が聴き手の心にどれほど深くとどくかを思いしらされました。それだけでなく子どもは絵本の絵をくまなく言葉として読みとることもわかりました。たしかに絵は言葉そのものです。大人は絵を見るだけなのに子どもは絵を読みます。そのうえ語り手が“手”で絵本のページをめくる動きが物語を動かし、絵本というものの本質と楽しさを伝えることがわかり、本好きと言葉好きを幼児から青年期にかけて身に付けることが、読書力を養うだけでなく、声の文化と文字の文化の結晶である聖書にいたる道をひらくのだと確信しました。

聖書では主イエスは終始そのみ言葉を語りつづけ、自ら書かれてはいません。そのみ言葉は弟子達が記述したのです。弟子達の抜群の聴く力が、あのみごとな福音書を書き残したのです。聴く力を深く深く身につけていなければ、聖書を読んでもみ言葉の命と力を実感し、信仰することはできません。その配慮と実践の場が教会であり、積重ねの場が家庭と保育と学校教育の場です。それが不十分であればわが国の教会の未来に光はみえないのです。“光あれ”。

シリーズ「地の塩、世の光」は、各界で活躍のキリスト者の「証し」を連載するコーナーです。今回は、松居直氏にご寄稿頂きました。

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料その21は、青山学院日本人初代院長本多庸一先生のアメリカ・メソジスト宣教局との契約文書および若き本多庸一が青雲の志を抱いて横浜で勉強していた時の恩師ジェームズ・バラ (James Ballagh) にあてた弘前よりの英文書簡の紹介です。これらの史料は北米ニュージャージー州マディソン市のドウルー大学構内にある Methodist Archives に於て 1991年に筆者が蒐集したものです。

まず宣教師 Ballagh あての書簡。本多庸一は 1872 (明治5) 年5月3日、宣教師バラにより洗礼を受け、成立したばかりの日本基督公会に参加します。時に満23歳。この日本基督公会は超教派主義を標榜し、次のようにうたっていました。

「我輩ノ公会ハ宗派ニ属セズ。唯主耶蘇基督ノ名ニ依テ建ル所ナレバ、単ニ聖書ヲ標準トシ是ヲ信ジ是ヲ勉ムル者ハ皆是基督ノ僕、我等、兄弟ナレバ、会中ノ各員全世界、信徒ヲ同視シテ一家、親愛ヲ尽スベシ。是故ニ此会ヲ基督公会ト称ス」

これがいわゆる横浜バンドです。

1874 (明治7) 年11月、本多庸一は東奥義塾々頭に招かれ、宣教師イングを伴って弘前に帰ります。John Ing はメソジスト教会宣教師として中国に伝道し、その帰途横浜に立寄ったところをバラに説かれて本多庸一と行を共にして弘前に赴いたのでした。

さて、ここに紹介するのは本多庸一から Ballagh にあてた英文の書簡です。日付からみて、弘前メソジスト教会設立の直前のものです。本多はたて前上、横浜公会の会員のまま、横浜公会の分身として弘前公会を 1875 (明治8) 年8月に設立しました。それから約1年後、この公会はメソジスト教会に移ります。

“My dear Teacher Ballagh” という呼びかけで始まる弘前からの 1876 (明治9) 年1月15日附のこの手紙は、若き本多庸一の、現存する恐らく唯一の英文書簡であろうと思われるま

す。それだけに英語表現が不完全で意を十分に汲み取り難い部分もありますが、弘前に於て伝道と教育を始めた頃の彼のよろこびも苦勞もよく見えてきます。

「毎日曜日、この教会の人々は神の恵みのもとに真理について信仰と知識に向って励んでいます。24人のメンバーとその他4人が洗礼を受けようとしています」と近況を述べ「イング先生は毎日曜日と金曜日の夜、教えに来て下さっています」とイングに感謝しています。そして「今や迫害は以前より遥かにゆるくなりました」と伝道のよろこびを語っています。本多が弘前にキリスト教をもち込み伝道を始めた当初は、種々の迫害にとり囲まれていましたが、本多家という曾ての津軽藩の重臣の出自に於て、本多庸一自身の才能・人物に於て、そして使命感に燃えた誠実な情熱に於て、「本多のヤツならば…」という信頼が人々の白眼視を和らげ、漸くここまで漕ぎつけた、ということでしょう。然し、「働き手は少ないし、第一資金に窮乏している」と嘆きを洩らし、「100ドルを横浜公会から頂いた」ことに感謝しています。「更にこの教会の発展のために沢山のことを考えなければならぬ」として、「良い外人教師を将来何年も教会でも学校でも備うこと」に対する不安を述べ、「イング先生はこのことに大変同情し心配して下さいます」。「そのためには外国ミッションをオープンにすることが恐らく唯一の解決策であって、教会と学校にとって共に大きな助けとなるであろう。メソジスト教会はそれが出来るし、そうするであろう」とイングの忠告をあげ「プレスビテリアンやコングリゲーション (組合教会) やその他の教会よりもメソジスト教会の助けをかりる方が、より賢明だと思われます」と彼の考えを述べています。この書簡を恩師バラにあてて書いたのが前述したように 1876 (明治9) 年1月15日ですが、このあと間もなくバラ師あてに長文の書簡を書いています。そこでは本多が弘前時代に公会を離脱して、バラの属する一致教会に加わらず、

メソジスト教会に移ったことに対する一種の弁明や主張がこまごまと書かれています。この釈明の手紙の下書きは本多繁「本多庸一未発表文献」『宮城学院研究論文集』Ⅱに収められています。

いずれにせよ、弘前教会がメソジストを受け入れたことは、勿論イングの真摯な人柄の影響によることが大きいと思われませんが、本多が恩師バラに送ったこの書簡に接して、彼のメソジスト転向のいきさつが見えてくるようです。この書簡は最後に“Your’s Humble Pupil in Christ”と結ばれています。

次に本多庸一が宗教と教育に生涯を捧げる決意を以てアメリカから帰国した時のいきさつを物語る資料を紹介しましょう。1888（明治21）年9月から1890（明治23）年6月まで本多は渡米します。「宗教々育の視察が目的」でありましたが「政事方面にも視線が向いて」いました。「政治か宗教か」——前途の進路を思い悩んでいた唯中で、ペンシルヴァニア州ピッツトン駅近くの小橋上での列車禍危機一髪の体験を天の警告と受け止めた劇的な回心のエピソードは良く知られていますが、これを契機として政界のキャリアを断念し、宗教教育の道に専心するに至り、ドゥルー大学で神学を勉強した後、アメリカ・メソジスト宣教局の推薦を得て帰国します。その時の宣教局との契約（Agreement）が残されているのです。そこには大要次のように記されています。

Y. Hondaはその政治生活を全く断念して、メソジスト監督教会（Methodist Episcopal Church）の日本における宣教師の仕事に全身全霊を捧げる決意を以て日本に帰ることに同意した。この契約は上記の証明である。本多は教会及び宣教局の権限によって委任された任務につき、報酬を受ける。彼は外国人宣教師としてではなく、日本人伝道者（native worker）として奉仕するために日本に赴くのである。上記の条件に宣教局は同意し、日本への渡航費として200ドルを超えない額を支給する。本多は25

ドルを毎四半期に返済する。」

そして監督 S. L. Baldwin、総主事 J. O. Peck と本多庸一 Yoitsu Honda のサインがあります。

ところで、この本多庸一のサインですが、実は本多庸一はヨウイチかヨウイツかということが長年の疑問であったのです。彼自身はお国なまりがかなり強かったようで、津軽弁で“ヨウエツ”に近い発音をしていたに違いありませんが、勿論録音がない以上キメ手がありませんでした。ローマ字サインがあれば解決するのですが、彼はいつも Y. Honda とだけサインをしていたのでした。ところがここで始めて Yoitsu というサインに出会い、本多庸一はホンダヨウイツ（Honda Yoitsu）であったことがわかった次第です。

さて、本多はこうして日本に帰国するのですが、その途上で書かれたと思われる宣教局総主事 Peck 宛の手紙があります。それによれば1890（明治23）年6月4日にニューヨークを発ち、6月14日にサンフランシスコを出航して太平洋上に一週間、ホノルルに6月22日に着き、ここの教会で説教をしたという報告です。こうして無事日本に帰国し、東京英和学校総理（青山学院々長）に就任したのでした。



中間省略…
（本多の日本での伝道者としてのステータス及び経済的条件について）

『「集団自決」を心に刻んで——沖縄キリスト者の絶望からの精神史——』

金城重明著 (高文研、1995年)

鈴木直子

女子短期大学国文学科准教授

本書は、沖縄出身の牧師・金城重明氏の信仰と体験・活動を綴った自伝的書です。

金城重明氏は、青山学院大学神学部にて学ばれた校友です。一六才のとき、出身地の沖縄・渡嘉敷島にて、「集団自決」を体験し、その後キリスト教に出会って、現在に至るまで平和を実現するために歩んでおられます。金城氏をとおして、「集団自決」問題はもとより、戦後沖縄におけるキリスト者の平和への取り組みの歴史が浮き彫りにされています。

2007年の今年、高校歴史教科書の沖縄戦に関する記述に検定意見がつき、「集団自決」への日本軍の関与を否定するような記述に改められることになったのを受け、沖縄では大きな反対運動が occurred。またこの教科書問題のそもそもの発端となったのは、「集団自決」を命じたとされてきたもと日本軍守備隊長らが、「命令はしていない。大江氏らの著作は名誉毀損である」として提訴した公判中の裁判（いわゆる「岩波・大江沖縄戦裁判」）です。渡嘉敷島の「集団自決」の生き証人である金城氏は、「集団自決」が軍の関与で起こったという事実が埋もれてしまわぬよう、各所で発言し、裁判の証言台にも立っておられます。

こうした金城氏の姿勢は、キリスト教における平和の位置づけ、ならびにキリスト者の平和への態度についての、氏の深い理解にもとづいています。本書において氏は、キリスト教と平和について、「平和は、イエス・

キリストの救いの周縁的な事柄ではなく、その核心に関わる要素であります」とし、「キリスト教会の長い歴史において、“平和”は、教会の宣教活動の本流から周辺に追いやられてきたように思います。教会が平和を語る時、心の平安、共同体内部の“和”（パックス）と理解され、平和概念を、社会や国家、あるいは世界的規模にまで押し広げて考えることをしてこなかったのであります。」と述べられ、「実践・行為をともなわない信仰は、観念的になり、脆いもの」であることを指摘しています。そして、「平和創造の第一の主体はキリストであるにもかかわらず、神は私たち人間に参与を呼びかけておられます。」「キリスト者は、神から授かった和解の賜物を、自らの内面に閉じ込めることなく、他の人々に伝えてゆく任務を与えられているのであります。」と述べられ、平和の実現においてまさに「世の光」たらんとする氏の姿勢を説明しておられるのです。

また本書には、青山学院時代のエピソードが紹介されているのも興味深いことです。氏の勉学への意欲はすさまじく、「夏休みや

春休みなど長期の休暇には、自分の体力に挑戦する意味も含めて、一日に何時間勉強に耐え得るか試してみました。一日平均一五時間の勉強は一週間ほど継続できたのですが、一七時間平均では体力が続きませんでした。」とのくだりには、私自身の学問への態度を大いに反省させられました。



日本福音キリスト教会連合 永福南キリスト教会

池田 敏

高等部教諭

永福南キリスト教会は、1985年、浜田山キリスト教会が開拓伝道の教会として22名の教会員を派遣し、下高井戸駅近くの民家を借りて始めました。建物が普通の民家であったこと、また派遣されたメンバーが同じ若い世代が多かったことなどから、家族的な雰囲気を持ち続けている教会です。1993年にそれまで借りていた民家を、それ以上借りられなくなり、現在の地に移転しました。徒歩20分ほど離れた地になりましたが、何とかぎりぎり「永福南」という名称に耐えられる地域で名称を変えずに済みました。現在の会堂も民家で、広め（約30畳）のリビングで礼拝を守っております。この22年間で人数は大幅に人が増え、現在60～70名ほどが出席しています。民家では収容しにくい人数で、現在建て直しを準備しております。

場所は井の頭線西永福駅から徒歩5分ほどの閑静な住宅街で、神田川沿いにあります。川沿いの遊歩道を散歩する人が看板を見て立ち寄ることも少なくありません。緑の多い地域で、川沿いの並木や、庭の植栽も豊かで緑を見ながらの礼拝で心の落ち着きを取り戻せるような気がします。大きな特徴として、集まる人は皆、教会にすることが大好きで、日曜日となると終日を教会

で過ごす人がたくさんいます。そのため毎日曜日当番を決め、昼食の提供をしております。その当番もいわゆる婦人会に頼りっぱなしではなく、男性や若者も参加し、とてもおいしいと評判です。午後もお茶を飲みながらの交わりや、神学生がリードしてくださる聖書研究会、また有志での祈り合いなど、人のつながりを大切にしている教会です。

竹内豪牧師は、人の話を聞くことが上手な先生で、私たちは頼りきっています。礼拝の度に御言葉に養われることの喜びを実感しています。都会の教会の宿命で、遠方から通っている人が多かったのですが、近年どうしても教会の近くに住みたいという人が増え、続々と近隣に越してきました。私もその一人で、教会まで自転車で5分ほどのところに住み、日曜日以外にも足を運ぶことが少なくありません。コミュニティーの中心になっています。

連なる一人一人に目を留め育ててくださる神様に心から感謝する日々です。



竹内牧師



礼拝の様子



初等部の新しい礼拝堂 米山記念礼拝堂

小澤 淳一
初等部宗教主任



米山記念礼拝堂は、米山梅吉先生を記念して命名されました。1937年、青山学院小学財団が設立され、青山学院緑ヶ岡小学校を開校しました。その初代部長が米山梅吉先生です。初等部の校舎が以前、現在の女子短期大学の場所にあったとき、「米山記念講堂」という建物がありました。その後、現在の場所に移ったときには、「米山記念・・・」という名称は消えました。今回、ガウチャー記念礼拝堂やオスカーミラー礼拝堂などの名称に倣い、初等部創立70周年を記念して、「米山記念礼拝堂」と名付けることになりました。

新しい礼拝堂は、旧礼拝堂の面影を残しつつ、より多くの会衆が集うことができるように座席数を945席としました。旧礼拝堂のステンドグラス、パイプオルガン、連立の十字架、燭台などはそのまま移設しました。13メートルの天井は、豊かな響きを作りだしています。礼拝堂エントランスは全面ガラス張りです。外光をたくさん取り入れ、光に満ちた礼拝堂となっています。



コラム

クリスマス・ツリー

今年もクリスマス・ツリー点火祭が青山と相模原の両キャンパスで行われました。アドヴェント（待降節）に入る直前の金曜日の夕刻に、毎年行われる盛大な礼拝です。ところで、クリスマス・ツリーとは何を象徴するものなのでしょうか。いろいろな説がありますが、どうも創世記に記された墮罪物語と関連性があるようです。

人間は神にかたどって造られた特別な存在でしたが、蛇の誘惑に負け、神との唯一の約束を破ってしまいます。そしてエデンの園から追放されます。創世記3：24には、「(主なる神は) こうしてアダムを追放し、**命の木**に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた」と記されています。神との約束を破ることによって楽園の門は閉ざされ、命の木に近づく道は断たれてしまったのです。しかし命の木に至る道は、「道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14：6) イエス・キリストによって、再び通ることができるようになります。ローマの信徒への手紙は、この恵みの出来事を次のように述べます。「一人の人の不従順によって多くの人が罪

人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです」(5：19)。つまり、最初の人アダムによって罪が世に入り、全ての人に及んだわけですが、キリストが十字架の上で贖いの死を遂げることにより、全人類の罪は洗い清められたのです。

この全人類の救い主であるキリストが、私たち人間と同じ肉体をまとい、聖なる夜に地上にお生まれくださった。こうしたキリストの誕生と贖罪を想起させるのが、クリスマス・ツリーの役割なのです。16世紀のヨーロッパでは、クリスマス・ツリーの飾りとして、林檎と聖餐式のパンが一緒につるされていたそうです。林檎は墮罪を意味し、聖餐式のパンは贖罪を意味しています。しかし世俗化によって、聖餐式のパンはいつの間にかクッキーに姿を変えてしまいました。青山学院に連なる私たちは、建学の精神であるキリスト教信仰を堅持し、本来の意味を後世に伝えて参りましょう。

ちなみに青山キャンパスのクリスマス・ツリーはヒマラヤスギで、高さは約10メートル。電球の数は295個で、アドヴェント前日の11月30日からクリスマス当日の12月25日の毎日、午後4時から10時30分まで点灯されます。(高砂民宣)

幼稚園 より

クリスマス礼拝

12月14日(金)
年長児が聖誕劇を行います。礼拝の後は、子どもたちの手作りのお菓子を持って学院内をキャラリングに出かけます。



始業礼拝

1月9日(水)
3学期のスタートです。全園児と保護者の方々とで礼拝を守ります。

おもちつき

1月30日(水)
お相撲さんと一緒につきます。合わせて「力士対子ども」のお相撲大会も行われます。

卒園礼拝

3月6日(木)
卒園を直前にした年長児と保護者が今年度は短大のタヒューン先生をお迎えして説教を聴きます。

終業礼拝 3月13日(木)

卒園式 3月14日(金)

入園式 4月10日(木)

(教諭 多々内三恵子)

初等部 より

初等部は11月16日(金)に70周年記念式典を終え、新たな一歩を歩み始めました。新校舎建築もすべて終わり、校庭は天然の芝生になり、子どもたちは裸足になって遊んでいます。

聖書週間特別礼拝

10月17日(水)
北陸学院中学・高等学校の校長、堀岡啓信先生からお話を伺いました。

となり人を覚える礼拝

11月9日(金)
児童宗教プロジェクトのCCWAスタッフを中心に、初等部が支えている6人の里子の紹介と07年3月にフィリピンの里子を訪問した2人の児童の報告を受けました。

創立記念礼拝

11月16日(金)

初等部創立70周年の創立記念礼拝を守りました。お話は、初等部長の上戸秀夫先生。

感謝祭礼拝

11月22日(木)

神様の恵みとしての収穫物を礼拝堂に持ち寄り感謝をする礼拝を守りました。お話は、小澤淳一宗教主任。

アドベントコンサート

11月30日(金)

新しく完成した米山記念礼拝堂で行われる最初のアドベントコンサート。11回目になりました。

演奏者として市ヶ谷ルーテル教会オルガニストの湯口依子氏を、また、賛助出演として山本英助氏(トランペット)をお迎えしました。

保護者のためのクリスマス礼拝

12月7日(金)

新1年生の保護者の方々もお迎えしてクリスマスの礼拝を守りました。説教者は岩田昌路先生(狛江教会牧師)。

クリスマス讃美礼拝

12月20日(木)

50年以上同じ台本でページェントを守ります。6年間に1度だけ、ご奉仕ができます。

(宗教主任 小澤淳一)

中等部 より

クリスマス礼拝

2007年12月18日(火) 14時～15時30分

青山学院講堂

礼拝はページェント形式で行われ、聖歌隊・聖書朗読などあらゆる奉仕が生徒によって進められます。

伝道週間

2008年2月12日(火)～15日(金)

青山学院講堂

講師：日本基督教団狛江教会牧師 岩田昌路先生

国際交流・宗教講演会

2008年2月19日(火) 6時限目

講師：ジュリウス・クジュール神父(「イエス・アシラム」代表)と小林進司祭(「イエス・アシラム支援の会日本」代表)。インド・コルカタ郊外にあるハンセン病やAIDSなどの患者の治療・療養施設とその支援団体の代表者による講演会です。

卒業礼拝

2008年3月12日(水) 9時00分

青山学院講堂

説教者：日本基督教団中渋谷教会牧師 及川信先生

(宗教主任 西田恵一郎)

高等部 より

クリスマス礼拝

高等部のクリスマス礼拝、祝会は12月19日(水)、PS講堂で行われます。第1部は礼拝。クリスマス説教は、宗野鏡子氏(田園江田教会)、「さあ、ベツレヘムへ行こう」です。聖歌隊の賛美とハンドベル部による演奏が加わります。

第2部としてクリスマス祝会を行います。佐々木冬彦氏によるハーブ演奏と信仰の語りがあります。

クリスマス合同コンサート

聖歌隊、オルガン部、ハンドベル部による合同コンサートは12月22日(土)にガウチャー記念礼拝堂で行われます。今年もオルガン部メンバーによるオルガン演奏、ハンドベル部のハンドベル演奏、聖歌隊の合唱によるメサイアが演奏されます。

このコンサートは一般に公開されていますので、誰でも入場できます。多くの方のご来場をお待ちしています。
(宗教主任 坂上三男)

女子短大 より

クリスマス礼拝

12月19日(水) 13:00～14:30

青山学院講堂

説教: 小室尚子先生(東京女子大学准教授)

天城・冬の集い

1月30日(水)～2月1日(金)

天城山荘

特別講師: 伊藤悟先生(大学宗教主任)

*街の、騒々しいクリスマス・ソングや、眩しすぎるイルミネーションに疲れたときには、短大のクリスマス礼拝においで下さい。共に、静かな祈りのときをもちましょう。
(宗教委員 西願広望)

大学 より

クリスマス礼拝

12月18日(火)

18:00～

ガウチャー記念
礼拝堂(青山)

12月20日(木)

17:50～

ウエスレー・

チャペル(相模原)

説教 いずれも藤本満氏(インマヌエル高津キリスト教会)

チャールズ・ウェスレー生誕300年記念コンサート

12月6日(木) 16:40～ ウエスレー・チャペル(相模原)

12月18日(火) 19:30～ ガウチャー記念礼拝堂(青山)

皆様のご来場をお待ちしております。

オルガニスト養成講座受講生発表会

12月17日(月) 18:15～ ウエスレー・チャペル(相模原)

2月4日(月) 17:00～ ガウチャー記念礼拝堂(青山)

講座受講の学生によるパイプオルガン発表会です。

(宗教センター事務局 平野修一)

本部 より

Art クリスマス Aoyama

11月27日(火)～12月21日(金)

短大ギャラリー一他

クリスマスをテ

マとした絵画展です。

どなたでもご自由に

ご来場下さい。

教職員新年礼拝

2008年1月9日(水) 16:30～

ガウチャー記念礼拝堂

(宗教センター事務局 平野修一)



編集後記

クリスマスについて知らなかったこと:

①現在のサンタは、19世紀の漫画家 Thomas Nast の作品からできた。②クリスマスがほとんどの国で最大の経済的刺激である。③アメリカ最高裁は2000年12月19日の判決でクリスマスの違法性について判断した。④クリスマスに関する最初の記録は、Philolacus が354年に書いた著書にある。⑤クリスマスツリーに関する最初の記録は、ドイツ Bremen 市の1570年文書にある。⑥Bostonでは、1659年から1681年までクリスマスを禁止する法律があった。

毎年クリスマスのたびに、新しい発見があります。今回も多くの方々に執筆いただきました。皆様、良いクリスマスをお迎えください。
(Lenz)

Wesley Hall News 第94号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 嶋田順好
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537 (ダイヤルイン)
URL:<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail:agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウエスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社